



2013年8月 第11巻第8号

### かく語りき—聖人の言葉

「束縛も解脱も、心で行われるだけだ」  
(シュリー・ラーマクリシュナ)

「考えを静めるよう努めなさい。瞑想  
では心を一点に集中させるのだ」  
(シュリー・クリシュナ)

### 今月の目次

- ・かく語りき—聖人の言葉
- ・9月の予定
- ・(スワミー・ヴィヴェーカーナンダ  
生誕150周年祝賀会開会式  
来賓のスピーチ)  
「諸宗教の協調を願って」  
奈良康明博士
- ・マハーラージの活動報告
- ・忘れられない物語
- ・今月の思想

### 今月の予定

- ・生誕日・

スワミー・アドワイターナンダ 9  
月4日(水)

スワミー・アベダーナンダ 9月28  
日(土)

### ・9月のスケジュール・

1日(日) サットサンガ in 札幌 10:  
30~12:30 および 14:00~16:30  
札幌市資料館(札幌市中央区大通り西  
13丁目)

7日(土) 東京・インド大使館例会  
14:00~16:00  
講演: バガヴァッド・ギター(無料)  
場所: インド大使館 : 03-3262-2391  
お問い合わせ: 逗子協会 046-873-0428

8日(日) サットサンガ in 多治見  
10:30~13:00(瞑想・Q&Aを含みます)  
場所: 多治見市 根本交流センター  
会議室1(JR 太多線 根本駅 徒歩3  
分)  
お問い合わせ: 上野 090-6363-8558

11日~16日 マハラージマニラ訪問の  
ため逗子本部に不在となります。

22 日（日） 逗子例会 10:30～14:30  
\* 第三日曜日ではありませんのでご注意ください。

お問い合わせ：逗子協会 046-873-0428

23 日（月・祝） サットサンガ in 熊本  
詳細は特別プログラムをご覧ください。  
\* スワミーは 23 日～26 日まで逗子本部に不在となります。

28 日～29 日 ナマステインディア（東京代々木公園）

スワミー・ヴィヴェーカーナンダと日本の関係の展示会

日本ヴェーダーンタ協会は「ガンガー CD ショップ」という店名で書籍、CD 他 数々の品物を特別価格で出品予定。新しい DVD「ヴィヴェーカーナンダ・バイ・ヴィヴェーカーナンダ」も販売されます。

<http://www.indofestival.com/index.html>

27 日（金） ナラ・ナーラーヤナ（ホームレス神様への奉仕活動）

現地でのお食事配布等

お問い合わせ：佐藤 090-6544-9304

**スワミー・ヴィヴェーカーナンダ生誕 150 周年祝賀会開会式**

**2013 年 6 月 9 日 東京・インド大使館 来賓のスピーチ**

**「諸宗教の協調を願って」**

**一般財団法人・仏教学術振興会理事長  
曹洞宗大本山永平寺西堂**

**奈良康明博士**

私がラーマクリシュナおよびヴィヴェーカーナンダに出合ったのは 1956 年カルカッタ大学に留学して以来のことです。親しい友人たちの多くが信者でしたし、ヒンドゥー教と云うインドそのものというべき古い伝承に新しい息吹を与えた運動、ということで関心があり、いろいろと学ばせてもらいました。1983 年にはラーマクリシュナの生涯と思想についての本も出させてもらっています。



私がこの二人の宗教的偉人から学んだことは少なくありませんが、そのなかで最大のものはやはり世界の諸宗教が根源的には同じだという思想です。同じガート（水浴池）から汲んだ水を jala といい、pani といい、water といっても同じ水ではないか、という譬喩（『不滅の言葉（コムリト）』・1884. 6. 20）は、今日では、諸宗教の調和をはかり、

対話を試みている者には大きな導きの言葉となっています。しかしその当時としては驚くべき発言であり、発想であったに違いありません。自分の宗教信仰のみを唯一絶対なものとして他を無視するどころか、邪悪有害なものとして排斥する傾向が強かった時代なのでありますから。

ラーマクリシュナは自らの宗教体験のなかから、ごく当たり前のこととして諸宗教が根源的に一なることを確信しています。そしてそれはインドの伝承の中心的思想でもあります。私たちは世界最古の文献であるリグヴェーダの「唯一なるものを賢者は(インドラ、ミトラ、ヴァルナ、アグニ、ヤマなど)種々に呼ぶ」(Rg-Veda, I. 164. 46)という思想を知っています。その当時から宗教的真実、根源は一であることが宗教者、思想家の間に体験的に知られていたに違いありません。

そして釈尊ブッダもこの思想を肯けがっています。

「真実 (sacca) はただ一つである、二つとはない。したがって悟った人はそれについて人々と議論しない。ところが彼ら沙門たちはめいめい自説をほめるので、真実がさまざまになり、したがって同じことを教えないのである。」(『スッタニパータ』 884)

個人的な体験になりますが、私がイ

ンドに赴いた (おもむいた) 1956 年から翌 57 年にかけてブッダ生誕 2500 年記念祭 (Buddha Jayanti) が東南アジアそしてインドでも盛大に催されていました。その一つの企画として私はパトナ大学の学生が行った影絵芝居をみて大きなショックを受けています。ブッダが菩提樹の枝を背の高い人に渡します。イエス・キリストです。そして同じ枝がムハンマドに与えられ、最後に渡されたのがマハートマ・ガンディーでした。この四者が同じ宗教を説いたとか、思想の継承があるとかいうことでは無論ありません。それぞれに異なる思想と実践を説いているのですが、それにもかかわらず、共通の真実が四者の根底に横たわっていることをいうもので、私は大きな感銘を受けたことをおぼえています。

「真実の一つ、それを賢者は様々に説く」という思想はインドの宗教の寛容性と共存を歴史的に保証するものであります。すべて宗教が同一の根源に由来するものであれば、宗派の差による争いは無意味となります。ヴィヴェーカーナンダも 1893 年のシカゴ市での世界宗教会議で語っていますが、インドではいかなる宗教も弾圧されることなく、平和裡に共存してきました。ヒンドゥー教、仏教、ジャイナ教などの寛容性はたしかにインドの地に育った宗教の大きな特徴でありましょう。

そして異なる宗教信徒の間に絶えざる紛争、確執が目立つ現代に於いて、宗教者間の相互理解と協調をはかるための「宗教者対話」が必要になっていますし、現にさまざまな規模で行われています。その際に、各宗教が根源的に同一であるという思想は大きな意味を持っています。

「真実の一つ」という思想ときわめて類似する思想が今日西欧の哲学、宗教学の間で新たな装いと異なる脈絡で主張されています。いわゆる「宗教多元主義」(Religious Pluralism)といわれるもので、J. ヒック (John Hick)、D. トレーシー (David Tracy)、J. B. カブ (John B. Cobb Jr.) などの学者を中心に唱道されている思想です。なかでも英国の宗教学者である J. ヒックは、『神は多くの名前をもつ』(“God Has Many Names”, 1982) などの著書がありますが、キリスト教世界観が常識化している西欧において、「多くの名前をもつ God、神」という考え方自体が、旧来のキリスト教の基本的発想から大きく離れた変革であると同時に、唯一の真実が多くの神の名によって呼ばれているという上述の『リグヴェーダ』以来のインド思想への接近を示していると言えるものでしょう。

宗教多元主義が主張されるようになった背景にはいくつかの要因があります。現代の特徴の一つとして、地球は

狭くなり、さまざまに異なる宗教を信奉している人が同じ社会に共存するようになりました。すると、従来のように、キリスト教の絶対性を主張していたのでは、新しい時代の人間関係、異教徒との間の秩序、をつくることは難しくなります。また、クリスチャンも賞賛せざるを得ないような「霊性」(spirituality) の深さが他宗教の伝承にもあることが明らかになってきて、そうした宗教の評価も問われてきます。

また世界の宗教の間の協調をはかるという視点からは、旧来の各異宗教間、特にキリスト教と他宗教、との関係が反省されざるを得ません。キリスト教の「歴史的な独善性」、例えば、カトリックの「教会の外に救いはない」とか、プロテスタントの「キリスト教を除いて救いはない」といった主張はもはや超えられるべきであって、それは「宗教排他主義」(Exclusivism) だとヒックは言います。

しかし、特に 1962~1965 に行われた第二ヴァチカン公会議でいわゆるエキュメニカル運動が提唱された以降、この姿勢は変わってきました。世界の状況に対応しながら、キリスト教側から諸宗教の融和と共存の道が探られ始めました。これを受けて「宗教包括主義」(Inclusivism) と呼ばれる傾向が顕著(けんちょ) になってきました。これは他宗教の霊性と救済は認めるが、し

かし、自らの宗教的伝統の中に包み込むかたちでそれを理解するものです。例えば、神は異教徒にも同様に愛を与えられる、とか、他宗教の信仰に深く生きる人を、彼こそ真のクリスチャンだ、などというタイプの姿勢です。

こうした流れの中で、ヒック等は「宗教多元主義」(Religious Pluralism)を主張します。それは単に現在ある諸宗教の存在理由を認め、共存を試みようというのではありません。高次の宗教は、必ずや、宗教的実在のうえに宗教体験を持ち、信仰体系を築き上げ、文化として伝承してきたものです。それぞれの宗教の差よりも、各宗教が拠って立っている実在に注目し、「自我中心から実在中心への人間存在の変革」をこの運動は試みます。こうすることで、各宗教相互の違いは文化の問題にすぎず、相互批判と優劣を争う論争は本質的な意味を失うのではないか。

ヒック博士は、作業仮説として、「唯一の究極の実在」(One Ultimate Reality)を認めます。世界の高次の諸宗教はこの実在に基づいて、各民族がそれに対応し、それぞれの文化状況の中に、発展させ、伝承してきたものである。キリスト教の「神」、ユダヤ教の「ヤーウェー」、イスラム教の「アッラー」、ヒンドゥー教の「ブラフマン」、仏教の「法」(Dharma)、そして道教の「道」などは、究極的には、それぞれ

に体験された同一の実在である。人格的に、あるいは非人格的にとらえるなど、とらえ方はさまざまだが、いずれも同一の実在だ、と主張されています。

つまり究極的実在は普遍的な真実だが、各宗派で依存する真理は文化的所産として受容される個別的な真理ということになりましょう。この関係をヒック博士は譬喩を用いて、「エミーは世界で一番すばらしい女性だ」という恋人の言葉は彼にとって真理としてはたらいっているが、一般論としての歴史的真理ではない。同様にキリスト教の真理もクリスチャンにとっては信仰を成り立たせる重要な要件だが、一般的な真理性を主張するものではないというのであります。

したがって、宗教多元主義は精神性の高い宗教の併存をそのまま認めよう、という単純なものではなく、すべては同じ実在から発展してきたものという考え方なのですが、インドの「真実の一つ。賢者はそれを様々に説く」という伝承に限りなく近づいてきます。

しかし宗教多元主義は一つの理論であるだけに、多くの異論が提示されています。たとえば、もし「一の究極的実実」をいうのであれば、それはやはり万教帰一思想ではないか。

あるいは、各宗教の同質化を招くので

はないか、あるいは不可知のものではないかとか、批判されています。また、一つの究極的実在とは対話の前提ではなく、対話の結果として理解すべきものではないか、などです。

この問題はラマクリシュナ、ヴィヴェーカーナンダなどの「宗教体験から語る言葉」と、「理論的に主張された哲学」との隔たりを示しています。たしかに、異なる宗教思想の根源が同一かどうか、つまり各宗教信仰が拠っている真実の内容が同一かどうかのアイデンティティを求めることは容易なことではありません。しかし、今日の宗教対話は自ずと真実の一つというインド伝承の確信を証明する方向に動いているように思います。

日本における宗教対話の長い一つの実験を事例として申しあげたいと思います。

私は1967年以来、46年間「禅とキリスト教懇談会」という対話集会に関わっています。先述のエキュメニカル運動との関わりもあって発足したのですが、メンバーは仏教、神道、キリスト教等の信仰者であり、宗派は多岐にわたっています。本会議では三泊四日の合宿をしていますし、その他、1日だけの小さな集まりも年に数回開いています。参加人数は毎回二十数人です。

本会議ではあらかじめ決められたテーマについて、数人が見解を發表します。今までに取り上げられたテーマの幾つかをご参考までに記すと次のようなものです。

「私の魂の遍歴 (My Inward Journey)」、  
「私にとっての実在」、「請願 (Religious Vow) と実践」、「祈り」、「業 (Karman) と原罪 (Original Sin)」、「愛と慈悲～自他の関係」「死の彼方に」、  
「生活の中の祈り」、「他宗教から見た神と仏」、「多様性の一なるもの」、「宗教対話と自己変革」、「回心 (懺悔)・赦し・和解」 等々。

発表のあとに質疑応答や意見の発表があり、自由に話し合いが進みます。時に教理的な議論が生じることもあり、アカデミックな議論もありますが、基本的には宗教者としての生き方を話しあうものです。互いに学び合う姿勢がありますし、誰も優劣を争うものとは思っていません。自分の宗教を他におしつけることもありません。仏教者はあくまでもよき仏教者たるべきであり、クリスチャンは真摯なクリスチャンに徹しています。相手の宗教への敬意がありますから、かえって相互の人格への理解が深まります。合宿の際はたっぷりフリーの時間をとってあって、個人的な意見交換の場となっています。親しくなり、何でも話しあい、現代に生きる宗教者としての生き方と思想を



語り合う。「ああ、あなたもそう思う、私もそうなんだ」という肯きがしばしば生じます。そこに相互の理解は深まりますし、同時に重要なことは、他者の生き方が自分の生き方に戻ってきて反省させられることが少なくないことです。

こうしたことから、私たちは対話とは「相互理解と自己変革」であると受けとめています。それぞれに異なった思想と実践の根底に「なにものか絶対なるもの」が共通なものとしてあって、各人の宗教者としての存在を支えていることを実感せざるを得ません。そしてヴィヴェーカーナンダがシカゴ会議における最終スピーチ（1893.9.27）で述べた言葉は宗教的対話のあるべき姿を見事に明かしています。

「キリスト教徒がヒンドゥー教徒や仏教徒になるべきではなく、ヒンドゥー教徒や仏教徒がキリスト教徒になるべきでもありません、ただ各自が他者の精神を消化吸収しつつ、しかも自己の個性を保ち、彼自らの成長の法則に従って進歩すべきである。」

ラーマクリシュナそしてヴィヴェーカーナンダの諸宗教調和の教えは、その脈絡こそ幾分異なっていますが、遠い日本ではからずも実証されているのです。そしてその他の多くの対話集会においても、同様の追体験（ついたい

けん）と実証が行われています。宗教対話はどうしてもそこに行き着きます。それだけ「一なる真実」と各宗教信徒相互の「学習と自主性」というお二人の主張の見通しのたしかさを讃えるべきでありましょう。

## マハーラージの活動報告

飯塚講話：6月22日（土）、マハーラージは 福岡県飯塚市の立岩公民館で開催されたサットサンガで「善い願い、善くない願い」をテーマに講話を行いました。主催はヨーガ講師の小林氏、井出氏で、参加者は32名でした。



福岡講話：6月23日（日）、福岡市のココロヨーガスペースで開催されたサットサンガで、マハーラージは「至福」をテーマに『バガヴァッド・ギーター』に基づいた講話を行いました。主催はヨーガ講師の宮木サリ氏で、参加者は37名でした。参加された方々の感想をいくつかご紹介します。「10%の砂糖に、90%の砂粒。その10%の砂糖を見つけるためには、日々実践しなくてはいけないというお言葉。ありがとうございました。日々の生活の中で、そんな事を考えずに生きていました。気づきをあ

りがとうございます」「最後の瞑想はとも集中して出来ました。『こころはいつも自由を欲しがっている』という言葉はとても納得できました。毎日の生活の中で、少しでも瞑想を取り入れていきます」



葉山で講話：6月28日（金）、神奈川県葉山町一色会館で行われたイベント「葉山インド」の中で、マハーラージは「インドの文化と霊性」について講話を行いました。参加者は約40名でした。主催の笠原氏から当日の様子についてご報告をいただいたので、その一部をご紹介します。「(講話の中で)日本の瞑想の形である禅の瞑想が最近行われなれないのは残念で、瞑想というのは心をリフレッシュさせる、言わば心のお風呂ですとおっしゃると、神妙な面持ちで耳を傾けていた人々、子どもたちの表情は柔らかく、くつろぎに満ちた表情になりました」

東京ヨガセンターで講話：6月29日（土）、東京・新宿の東京ヨガセンターで、マハーラージは「日常で心を落ち着ける方法は？」をテーマに講話を行いました。22名が参加しました。



## 忘れられない物語

### 天国に針を届けて

裕福な長者様がおりましたが、ケチで意地悪で欲深い人でありました。1ルピーたりとも使わず、1パイサ（ルピーの百分の一）を寄付することも決してありませんでした。ある日、長者様は重い病気にかかり、寝たきりになってしまいました。人々の話では、長者様の生涯でたった一人の友人は自分の仕立屋だったそうです。が、不運なことにその仕立屋は数か月前に亡くなっていました。長者様があと数日しか生きられないことは誰もが知っていました。一人、また一人と、親族や隣人たちが、敬意を表して見舞いにやって来ました。仕立屋の息子が来たとき、長者様は「私はもう長くないよ。天国に昇るときが来たようだ」と言いました。

仕立屋の息子はまだ15歳でしたが、とても賢い若者でした。長者様が富を渴望しケチであることを知っていました。若者は答えました。「おお、長者様。



私の父はもう天国にいます。父は神様のために高級な服を縫い上げたいとたびたび私に言っていました。しかし、針を持って行くのを忘れてしまったのです。どうかこの針を持って行って父に渡していただけないでしょうか」

「ああ、いいとも。喜んで引き受けるよ」と長者様は言いました。

長者様は自分が何かを提供することがない限り、何でも喜んでやりました。針を受け取ると、若者を帰らせました。ベッドで一人になると、長者様は考え始めました。「どうやって針を持って行けばいいかな。私のシャツに刺しているか。いや無理だ。私の服はすべて火葬のまきと共に燃えてなくなる。口の中はどうだろう。頬に含んでみようか」そこで再び考えました。「いや、私のからだはすべて燃えて灰になる。どうやってこの小さな針を天国に持って行けばいいんだろう」

長者様は考えれば考えるほど、頭が混乱しました。結局仕立屋の息子呼び出しました。息子が来ると長者様は言いました。「息子さんよ、針はお返しするよ。私には天国まで持って行けそうにない」

「しかしですね」と息子は面白がった様子で言いました。「もし、あなたが何百万ルピーもの財産を天国に持って行

こうとなさっているなら、たった一本の小さな針を持って行けない訳がないでしょう」長者様の目からうろこが落ちました。自分が亡くなったら富も財産も一切持って行けないのだと悟ったのです。長者様は神に祈り、今まで邪悪な心だったことに許しを乞い、もし病気が治ったら自分の富を慈善事業にたくさん寄付すると約束しました。神は病気を治してやり、長者様は約束を守りました。大きな寺を建設し、多くの人々に食べ物を与え、恵まれない人々が少しでも楽に暮らせるようにしてやりました。

神やサドゥ（出家の修行者）、自分のグル（霊性の師）、貧しい人々のために使う富だけが価値あるものだということを覚えておきなさい。死んだ後に持って行けるのは私たちの良い行いだけで、他には何も持って行けないのです。（[www.baps.org](http://www.baps.org) ヨギジ・マハーラージのお話より）

## 今月の思想

「私は愛を持ち続けることにした。憎しみは、負うには大きすぎる重荷である」

（マーティン・ルーサー・キング・ジュニア）

発行：日本ヴェーダーンタ協会

249-0001 神奈川県逗子市久木 4-18-1

Tel: 046-873-0428

Fax: 046-873-0592

Website: <http://www.vedanta.jp>

Email: [info@vedanta.jp](mailto:info@vedanta.jp)